

京都大学附属図書館報



Seishu The Kyoto University Library Bulletin

静脩

2003年 5 月

Vol. 40, No. 1

これからの附属図書館 ―新たな時代を迎えて―

附属図書館長 佐々木 丞平

京都大学附属図書館が明治32年に創設されてから今年で104年になる。その間、本館を利用したと考えられる学生数は恐らく20万人を上回るであろう。特に近年では、年間の在校生数、つまり利用者数約2万人に対し、その利用頻度による延べ入館者数は実に70万人以上という急激な増加を見せている。創設当時の利用延べ人数に換算すれば正に膨大な数字となる。

その時代の様々な社会変化を大学も受け、学問の領域も拡大し、蔵書の内容も、その範囲も創設当時とは比べものにならないほど増加している。又、図書館の担う役割も大きく変化してきている。明治、大正、昭和と、図書館は蔵書を利用して知識を深める場としての役割を担っていたが、平成に入って図書館におけるインターネット利用システムの設置という、20年前には想像できなかった現状が展開している。時代の変化のスピードが速まると共に、図書館もそれに対応すべく動いてきた。電子ジャーナルやデータベースを利用しやすくするために、京都大学全体としてなるべく一元化する方向での調整役を続けているのもその一つである。京都大学が、学習研究のためのインフラの整備をより

一層充実させるためにも、関係者、各関係機関の更なるご協力をお願いしたい。

京都大学附属図書館においては、時代に即応することと同時に、現在



は電子媒体が重要な役割を担っているが、それがはたして今後もうまく機能し続けるのか、次なる時代変化がどのようなものであっても、基本的な部分では常に対応できるように配慮しておかなくてはならない。現代ではスピードを重視した研究方法が主体であるが、未来において、仮に電子媒体に混乱を来したとしたら、あるいは、スピードよりも時間をかけた深さを求める時代が来たとしたら、過去の時代のように、書物の行間から何かをつかみとる、あるいは目的の知識を得るためにさまざまな書籍に当たり、遠回りした分、広い視野と深い思索の時が持るといった、書物を主体とした研究形態が戻ってくることも考えられる。時代的变化を考えれ

ば、時代に即応することと同時に、基本的な部分を守り、長期的な視野をも大切にしなければならない。

来年はいよいよ国立大学も法人化元年を迎えることになる。大学自体も様々な変化を余儀なくされている今日ではあるが、大学附属図書館としての役割の内、何時の時代においても変わることなく守り続けられていることは、それは学生達が自ら学び研究するための、勉強と思考の場としての環境である。講義という教育の場に対し、学生の自主性を育み、各自の自由意志において真摯に知識を深める場は、まさに大学という機関の一つのシンボルであると思う。

京都大学においても教養部が存在しなくなった今日では、入学の時点から利用する学習図書館としての役割も担い、また一方では大学院生、研究員、教官の研究の場としての研究図書館として、ベースになる基本図書の設置と、さらに

専門的研究機能も保持し、近年盛んになってきた、従来の学問の領域を越える、横断的、学際的研究支援にも対応できることを目指している。

様々な新しい学問分野の確立に伴って、複数の学部にもたがう研究領域が広がり、それぞれの学部が不自由なく研究書を利用できる環境も大切になってくる。こうした、時代的な学術分野の変化の中で、各部局の専門書を主体とする図書室と連携し、それぞれの部局の独立性、独自性を守りながら、部局間、学問分野間の交流の促進と発展を支えることを目的として、京大附属図書館はあくまでも大学という総合組織の中で「各部局が共有できる独立した機関」として機能し続けることをより明確化していきたい。

今後益々のご協力をお願いする次第である。

(ささき じょうへい)

平成15年度企画展「和算」

平成15年度附属図書館公開企画展（展示会改め）は、「和算について（仮）」で準備を進めている。既に、この企画展でご指導と助言をいただきます京都大学理学研究科・理学部上野健爾教授から、「和算とは」と題して企画展ワーキング・メンバーに教授していただいた。

附属図書館は、昭和27年に佐藤則義氏から、和算関係の蔵書の寄贈を受けた。寄贈を受けた直後の同6月に、2代目附属図書館内にあった陳列室で企画展が開催されている。この時、佐藤家からの寄贈書と附属図書館所蔵本50点余りを展示、講演室で理学部数学教室小堀憲先生が「和算について」を、人文科学研究所蔵内先生が「中国数学の和算に及ぼせる影響」を講演されたとの記録がある。（『京都大学附属図書館60年史』）

今回は、百万遍にある「思文閣美術館」を会場に、今秋1ヶ月間開催する。江戸時代のミリオンセラーであった『塵劫記』（じんこうき）は、日本人の数処理能力の向上に大きく貢献したとされている。明治時代になって、学校で教える数学は西洋数学となったが、西洋数学の受容がスムーズに進んだのは、『塵劫記』で培われた数処理能力の結果とみられている。なお、『塵劫記』の著者・吉田光由（1598～1672）は、京都に縁が深い角倉一族であったし、佐藤家寄贈の資料には、和算から洋算への移行がはっきりわかる資料もある。

「数学は苦手」という人が多いが、上野教授をはじめ企画展ワーキング・メンバーは、「わかりやすく」を念頭に準備を進めている。